

井上良夫宛江戸川乱歩書簡(2)

〈解題〉

「大衆文化」第十号では、井上良夫に宛てた江戸川乱歩の書簡から、昭和十四年九月三十日のものを紹介した。その書簡では、フォーマンの「Guilt」とジョン・デイクス・カーの「To Wake the Dead」について論じられていた。

今回紹介するのは、昭和十三年二月一日のものである。この書簡ではイーデン・フィルポッツの「Physician, heal thyself」（「医者よ自分を癒せ」）について語られている。

井上良夫は乱歩の鳥羽造船所時代の知人の息子であったが、「ぶろふいる」などの探偵小説誌に評論を発表するようになり、昭和十年ごろから文通がはじまったと乱歩は『探偵小説四十年』に書いている。

昭和八年ごろからはじまった、乱歩のいう「日本探偵小説第二の山」では、夢野久作、小栗虫太郎、木々高太郎ら

が活躍している。井上良夫が評論や翻訳を発表したのもこの時期である。この盛り上がりは昭和十二年ごろには終息することになる。

昭和十二年というのは、日中戦争の始まった年で、乱歩のスクラップブックである「貼雑年譜」には「七月、シナ事変勃発するに及び、私の仕事は一入窮屈になった。もはや遊戯文学の時代ではないのである」と書かれている。探偵小説が徐々に発表しにくい状況になっていくのである。探偵小説誌「ぶろふいる」はこの年の四月号、「探偵春秋」は八月号で廃刊になり、一月に創刊された「シュピオ」も翌十三年の四月号で廃刊となった。探偵小説専門誌はこれですべてなくなり、雑誌「新青年」からも探偵小説が消えていった。

この「第二の山」の時期に乱歩は、評論「鬼の言葉」を「ぶろふいる」に連載するなど、評論活動に力を注いでいる。また、春秋社『日本探偵小説傑作集』と柳香書院『世界探偵名作全集』（『探偵小説四十年』では「世界探偵小説傑作叢書」と書かれている）との編集をおこなった。「世界探偵名作全集」は森下雨村と江戸川乱歩の編集となっているが、作品の選定などにも井上の影響が大きかったようである。この全集は、井上訳の『赤毛のレッドメイン一家』を

含む五冊を刊行したのみで中絶してしまふ。だが、この企画にかかわることゝ乱歩は海外探偵小説を吸収することになったのである。

この時期に井上良夫によつて紹介された作家には「樽」のF・W・クロフツ、「エンジェル家の殺人」のロジャー・スカレット、「完全殺人事件」のクリストファ・ブッシュ、「Yの悲劇」のバーナビー・ロス（のちにエラリー・クイーンの別名であることが知られる）などがある。なかでも、イーデン・フィルポツツは乱歩にとつて非常に重要な作家となつた。

イーデン・フィルポツツは、一八六二年に英領インドで生まれたイギリスの作家である。ダートムア・ノベルズといわれる田園小説や、歴史小説、戯曲の作者として著名だつた。実際には早い時期から探偵小説的なものも書いていたようだが、六十歳から探偵小説を發表し始めたというように日本では紹介されてきた。

隣家に住んでいた、若き日のアガサ・クリステイに助言をし、作家となるきっかけを与えたことでも知られていゝる。

また、ハリントン・ヘクスト名義でも『テンプラー家の

惨劇』『誰が駒鳥を殺したか?』といったミステリを書いてゐるが、フィルポツツとヘクストが同一人物であることが知られるようになるのは戦後のことである。

晩年まで執筆を続け、一九六〇年に九十八歳で亡くなつた。

乱歩によるもつとも有名なフィルポツツ評としては、評論「鬼の言葉」の、「赤毛のレドメイン一家」を紹介したものを挙げる事ができる。これは「ぶろふいる」昭和十年九月号に掲載されたものだが、単行本『鬼の言葉』（昭和十一年）のほか、『隨筆探偵小説』（昭和二十二年）、『海外探偵小説 作家と作品』（昭和三十二年）などにも再録されてゐる。

この評論は、昭和十年のはじめ、井上から借りた「赤毛のレドメイン一家」を読み、非常に感心したという記述から始まる。作者フィルポツツについて解説したあと、「赤毛のレドメイン一家」のあらすじを紹介していく。他の作家の作品などと比較しながらこの作品を評価して、「ロマンティズム本格探偵小説の最高峰と称しても云い過ぎではないであろう」と書いている。最後に、当時乱歩が把握していたフィルポツツの他の長篇小説を七つ列挙してゐる。

そのなかでも「A Voice from the Dark」（闇からの声）に ついては、「レドメインズ」に次ぐ傑作であると評している。

このように、乱歩は「赤毛のレドメイン家」を高く評価した。それだけでなく、昭和十一年一月から昭和十二年二月まで「講談倶楽部」に連載された乱歩の「緑衣の鬼」は、この「赤毛のレドメイン家」をもとにした翻案小説となっている。

また、戦後に再開された「ぶろふいる」誌の、昭和二十二年四月号に発表した「類聚ベスト・テン」のなかで乱歩は、「第一次大戦後の長篇ベスト・テン」として第一位にフィルポッツの「赤毛のレドメイン」を挙げている。このリストは評論集『幻影城』（昭和二十六年）にも「江戸川選、黄金時代ベスト・テン」として収録された。

『幻影城』では、乱歩が選定した作品のリストだけではなく、「ヴァン・ダインの推称した英国の九傑作」も紹介されている。このなかには、④に「誰が駒鳥を殺したか」、⑤に「赤毛のレドメイン家」の二作が入っている。さらに、「新青年の作家訳家投票による十傑作」にも、③に「赤毛のレドメイン家」が入っている。

このようにして、日本の多くの探偵小説読者の指針と

なったリストに登場することで、フィルポッツは知られていったのだった。

戦後、特に昭和二十五年以降になると、海外の探偵小説がつぎつぎと紹介されるようになっていくが、フィルポッツもそういった作家たちのひとりに入っていた。雑誌「別冊宝石」は「世界探偵小説傑作選」「世界探偵小説全集」といった作家別の特集号を出している。この「世界探偵小説全集」の、アガサ・クリステイ、F・W・クロフツに続く3番目として、昭和二十八年には「別冊宝石29 E・フィルポッツ篇」も刊行された。そこには乱歩が序文「フィルポッツについて」を書き、井上良夫訳「赤毛のレドメイン」が再録されたほか、桂英二訳「密室の守銭奴」（抄訳）、宇野利泰訳「医者よ自分を癒せ」が収録されている。『医者よ自分を癒せ』は、昭和三十一年に早川書房のポケットミステリでも刊行された。

乱歩は『海外探偵小説 作家と作品』のフィルポッツの項の「追記」で、「医者よ自分を癒せ」について「これは井上良夫君が大いに推称していたので、私も一読し、次に翻訳すべきフィルポッツの作として、人にも話していたのだが、それがこの「宝石」別冊でやっと訳されたのである。

この作は探偵よりも犯罪心理に重点が置かれていて、フィロポッツ独特の悪人の心理描写に魅力があつた。実に悪人を描くことのうまい作家である。」というように書いています。乱歩は「赤毛のレドメイン家」闇からの声」を重要な作品として挙げたが、二作には劣るものの、それに次ぐものとして「医者よ自分を癒せ」(Physician, heal thyself)は、高く評価された作品となつていたのである。

「密室の守銭奴」(Marybone Miser)は、米国版では「Jig-Saw」というタイトルで刊行されたもので、これも今回紹介する書簡で触れられている作品である。先に触れた「別冊宝石」序文では、「これは純然たるパズル小説で、米版の題の「ジグ・ソウ」(はめ絵)の方がふさわしい。カロライン・ウエルズなどは、これをフィロポッツの最上作としているのだが、なるほど本格味はこの方が強いけれども、フ氏の本領はやはり「赤毛」や「闇からの声」にあると思う。しかし謎小説としては充分面白く、冒頭に提出される「密室」の魅力、ジグ・ソウ・パズルの一片一片を探し求めるのだというリングローズの探偵法、最後に子供の絵本から密室の秘密を悟るすばらしい思いつきなど、捨てがたいものがある。犯人の異常性格も甚だ独創的で面白い。」とこうように書いている。

フィロポッツについての、乱歩以外の解説としては、まず、『世界推理小説大系第15巻 フィロポッツ』の荒正人による解説がある(訳すにあたって、乱歩より「赤毛のレドメイン家」「闇からの声」の原書を借りたとある)。作者について紹介するだけでなく、ダートムア、ドーチェスター、コモ湖といった舞台についても説明している。「鬼の言葉」も引用され、乱歩と井上の功績を評価したものになつている。

比較的新しいものとしては、森英俊『世界ミステリ作家辞典 本格派編』(国書刊行会 一九九八年)の「イーデン・フィロポッツ」の項や、石上三登志「誰が「駒鳥」を忘れたか?」(『創元推理』二〇〇二年夏号、『名探偵たちのユートピア』東京創元社二〇〇七年)、真田啓介「フィロポッツ問答」(ハリントン・ヘクスト『テンプラー家の惨劇』解説。国書刊行会二〇〇三年)といったものがある。

長谷部史親「続・欧米推理小説翻訳史12 イーデン・フィロポッツ」(『EQ』一九九七年七月号)を見ると、フィロポッツの名は大正期から少しずつ紹介されていたことがわかる。そして井上良夫の紹介と翻訳によって探偵小説の読者に受け入れられ、戦後に広まっていった様子が解説されている。

先に触れたように、井上訳『赤毛のレッドメイン一家』は「世界探偵名作全集」の一巻として昭和十年十月に刊行された。さらに『闇からの声』は大元社から昭和十七年十一月に出ている。これには乱歩の序文と井上の「フィルポッツに就て」が付されている。

戦後は、『赤毛のレッドメイン』として、昭和二十五年に井上訳に手を入れたものが雄鶏社から刊行されたほか、大岡昇平、荒正人など何種類かの翻訳も刊行された。なお、『The Red Rednaines』は昭和十年の井上訳では『赤毛のレッドメイン一家』と訳されているが、それ以外に『赤毛のレッドメイン』などいくつもの異なるタイトルで刊行されている。

フィルポッツの翻訳は昭和二十五年から三十五年ごろに集中して刊行されている。その後は少なくなつたものの、昭和五十年代にも出版されているので、決して忘れ去られた作家というわけではなかつた。

ただ、石上や真田の解説にもあるように、現在におけるフィルポッツの評価はそれほど高いとは言えないようである。乱歩によって高く評価された作家、という認識のされ方が一般的なようである。

乱歩によつても指摘されているように、フィルポッツの

特徴は、犯罪者の心理を描くことにある。探偵小説の性質上、評論などにおいて犯人像を詳しく記述して評価することは困難なため、たとえば特徴的な探偵のキャラクターによつて印象づけるような作品と比較すると、紹介文などで触れにくかつたはずで、フィルポッツ作品の知名度が次第に下がつていった背景には、そういったことも考えられるかもしれない。

今回紹介するこの井上宛書簡は、「医者よ自分を癒せ」について論じられたものとなっている。

まず、この作品の主人公はドストエフスキーの「罪と罰」の主人公を想起させはするが、それとは異なり、なんとなく同感できない部分が多いというように乱歩は述べる。

「医者よ自分を癒せ」の主人公は悪人なのだが、その自己弁護を作者が肯定的に書いているか判然としない。犯人の主張を作者が偽善として描いているのかもしれないが、正しいものとして書いているようにも見えてしまう。また、描かれる犯行動機が確固としていないので、正義として殺人をおこなつたとも、被害者への嫌悪からおこなつたとも、利己心からおこなつたとも考えられてしまう。このように、主人公の造形にまず不満を表明する。

だが、この作品の心理探求のところや、真相へと近づく展開などは高く評価し、ブルジェの「アンドレ・コルネリス」と近いものを感じるという。ブルジェはフランスの小説家で、明治期から翻訳されていた。こういった純文学には及ばないけれども、フィルポッツには他の探偵小説にはない教養と大人らしさというものがあると書く。

一方で、探偵小説の構成としては「意外性」が乏しい。また、父の行動や妻の造形、状況などにも不自然なところがあるように思われた。

このように不満を中心に述べたあと、評価できる部分を挙げる。主人公を悪人として描いているのであれば、としてこの悪人の描き方を評価する。悪人の描き方に、黒岩涙香の翻案小説と似たものを感じる。「探偵小説のみならず、広く文学一般を通じて、かういふ邪悪の恐ろしさを描き得る作家は、殆んど類がないと感じます。」

さらに「現在法律や習慣で邪悪とされてゐる行為も、永遠の眞実ではなく、絶対の罪なんてものはあり得ない。」こういった主人公の思想に乱歩は共感を表明している。

まとめとしては、「赤毛のレドメイン家」「闇からの声」「医師よ自分を癒せ」の三作品を乱歩はフィルポッツの三大犯罪小説と考えたが、この「医師よ自分を癒せ」は、他

の二作品と比べると少し劣っているというのが、この時点で評価ということになる。

井上良夫宛乱歩書簡は、すでに一部は「探偵小説論争」として中島河太郎によって紹介されている（同人誌「黄色の部屋」に掲載され、講談社版江戸川乱歩全集、講談社江戸川乱歩推理文庫などにも収録された）。昭和十八年の書簡が中心だが、その中でも、乱歩はくりかえし「赤毛のレドメイン家」について触れ、高く評価している。「闇からの声」については、昭和十八年一月二十七日付書簡で、探偵小説は再読と初読では印象が異なるといったことを述べたところで、「闇から」も再読したらそれほどでなかった」というように書かれている。

「医者よ自分を癒せ」については、同じ書簡で「今まで貴兄から拝借した本の内、御訳のあるものは別として、何が一番心に残っているかという、フィルポッツの医者 of 犯罪のあれです。何かとけなしましたが、今度は何を訳するかと考えると、小生の知っている範囲ではあれにとどめをさすのじゃないかと考えた事です。『To Wake』もいろいろ、何だかあの方に余計引かれるようです」と書かれている。

前号で紹介した「To Wake the Dead」と今回の「医者よ自分を癒せ」、昭和十三・四年の書簡での話題が昭和十八年にも続いており、これら二作品が二人にとって重要な作品であったことがわかる。

約二年後、昭和二十年四月に井上は病死するが、それまでの書簡でのやりとりによって準備されたものが、戦後乱歩の活動の礎となっていた。乱歩の海外探偵小説の知識は『随筆探偵小説』『幻影城』『続・幻影城』などの評論として結実する。それだけではなく、「ハヤカワ・ミステリ・ブックスの最初の一年ぐらいの出版は、この「幻影城」が指針となったのである」と『探偵小説四十年』で乱歩が書いているように、翻訳する作品の選定にも大きな影響を与えたのだった。

『続・幻影城』の「類別トリック集成」や『探偵小説の謎』などからもわかるように、乱歩は探偵小説のトリックを最も重視していた。

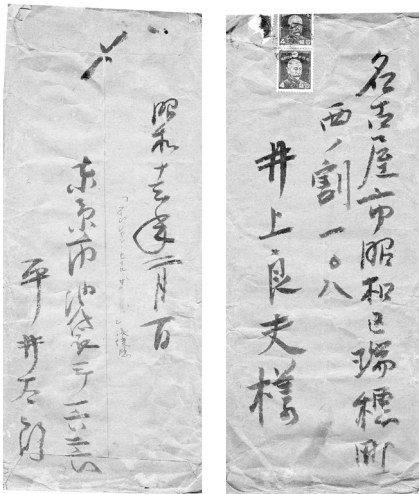
その一方で、たとえば、横溝正史の『本陣殺人事件』を評する際に、この作品の欠点として、悪人の描き方が不十分であることを指摘していることからも見られるように、トリックに次いで、悪人を描くことが探偵小説の重要な部

分とも考えていた。これも他の多くの評論でも見ることができし、乱歩が戦前に書きたいわゆる通俗長篇でも感じられるだろう。

この書簡は、フィルポッツの描く人物について書くことで、そのような、乱歩の探偵小説観の重要な部分に触れたものになっていると言えるだろう。

落合教幸

（立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター学術調査員）



フィルポッツの「医師の告白」やつと讀み終りました。来客其他に妨げられ飛びく四日程に亙つて讀みましたので、少し印象が散漫ですが、それは一つには、この作が僕には徹夜してよみ通す程は面白くなかつた為かも知れません。例によつて正直な感想を左記します。

○思想について

一言にして云へば主人公の思想は自然科学「的」(者の)ニヒリズムとも申すべきペシミズムと思ひますが、そしてこの作はその思想を表現する事が第一の目的であるかの如く感じられますが、その論理には直ちに肯[■]き得ないやうな矛盾(と云はぬまでも少くも[■]昏迷)が含まれてゐて、讀過中も讀了後も感銘のハッキリしないところがあります。さういふ矛盾した論理を持つ人物を「故意に」描いたのなればよろしきも、序文の文意よりせば作者はこの人物の論理[■]「を」同情し肯定してゐるかの如く見えるので、結局、[■]作として何かしら矛盾のやうなものが感じられます。

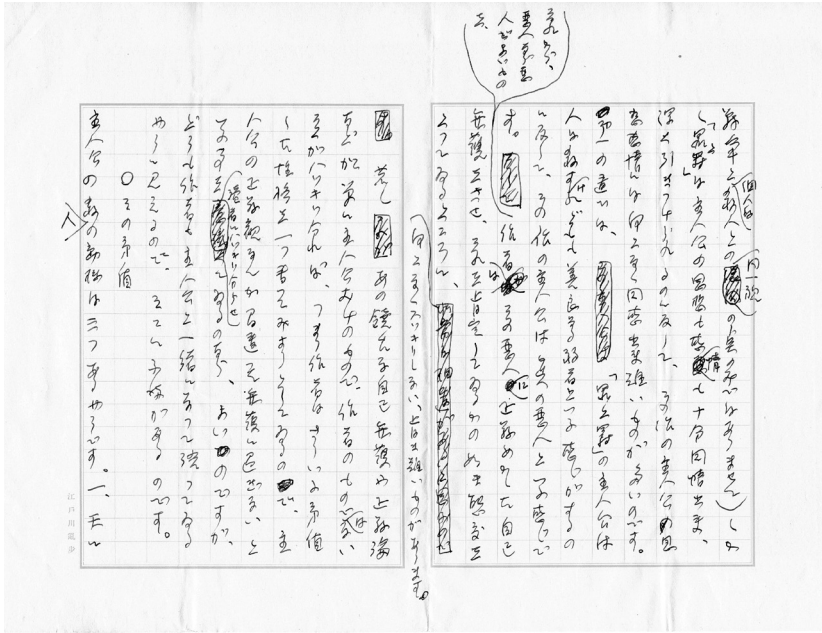
あるものなく感じられますが、この論理は、(その)「(主)人公の思想(犯罪肯定の)はド翁の「罪と罰」の主人[■]公の思想を思ひ起させますが(必ずしも戦争と「個人

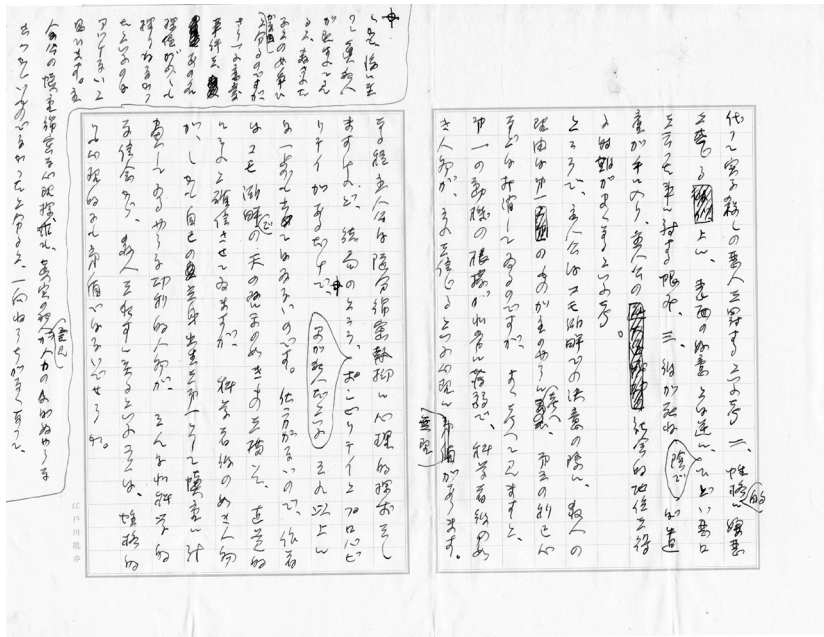
「」消してある部分

ぬりつぶしてある文字

「」挿入部分

□ 判読できなかった文字

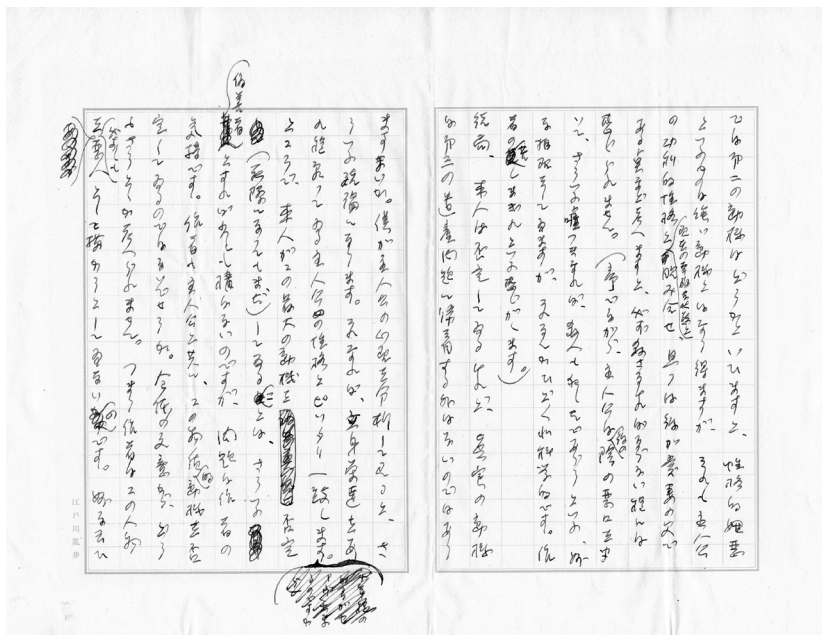




主人公の殺一人の動機は三つあるやうです。一、天に代つて実子殺しの悪人を罰するといふ考 二、性格「的」に嫌悪を感じる ■■上に、表面の好意とは逆に、「陰で」ひどい悪口を云つた事に対する恨み、三、彼が死ぬば遺産が手に入り、主人公の■■■■社会的地位を得る時難がなくなるといふ考。

ところで、主人公はコモ湖畔での決意の際に、殺人の理由は第一■■■のものが主のやうに■■■「考へ」、第三の利己心などは打消してゐるのですが、よく考へて見ますと、第一の動機の根拠が非常に薄弱で、科学者級の如き人物が、それを信じるといふ心理に「矛盾」「無理」があります。なる程主人公は随分綿密執拗に心理的探求をしますけれど、結局のところ、「父が犯人だといふ」ポシビリテイとプロバビリテイがあるだけで、

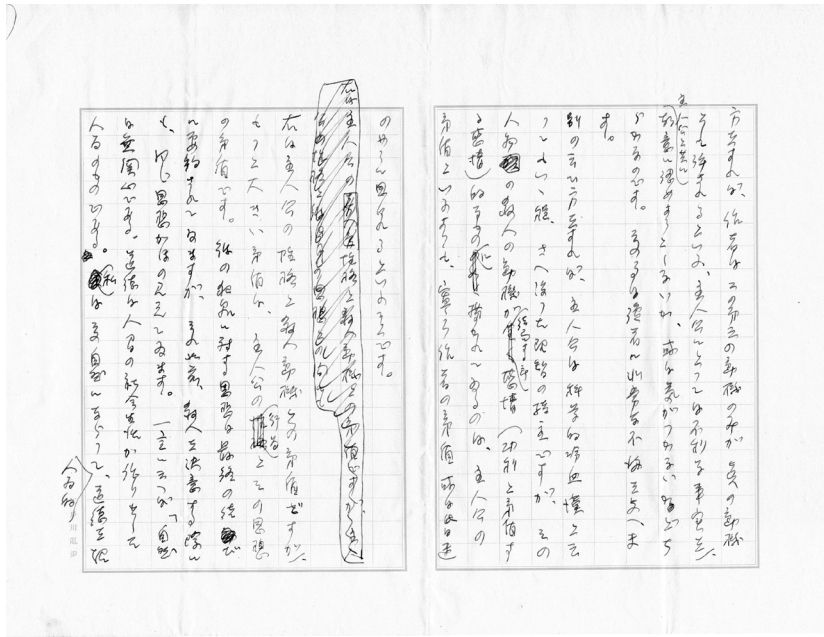
しかも、後に至つて眞犯人が現はれて見ると、殺された子との女争ひかな■と分るのですが、さういふ恋愛事件を、■■■あの名探偵が少しも探り得なかつたといふのはアツケないと思ひます。主人■■■公の慎重綿密な心理探求も、眞実の犯人「発見」が人力の及ばぬやうなむつかしいものでなかつたと分ると、一向ねうちがなくなつて、讀者は失望を禁じ得ません。



それ以上には一歩も出■てはゐないので。仕方がないので、作者は「コモ湖畔(一)」の天の啓示の如きものを描いて、直覚的にそれを確信させてゐますが、科学者級の如き人物が、しかも自己の■立身出世を第一として慎重に計畫してゐるやうな功利的人物が、そんな非科学的な信念から、殺人を犯すに至るといふことは、性格的にも心理的にも矛盾ではないでせうか。

では第二の動機はどうかといひますと、性格的嫌悪といふものは強い動機とはなり得ますが、それも主人公の功利的性格と「現在の幸福な状態と」■睨み合わせ、且つは彼が愛妻の父である点まで考へますと、必ず殺さなければならぬ程には感じられません。(序でながら、主人公は「彼の」陰の悪口を聞いて、さういふ嘘つきなれば、殺人も犯したであらうといふ、妙な推理をしてゐますが、これなんかひどく非科学的です。作者の■「苦」しまぎれといふ感じがします。)

結局、本人は否定してゐるけれど、眞実の動機は第三の遺産問題に帰着する外はないのではありますまいか。僕が主人公の心理を分析して見ると、さういふ結論になリます。これなれば、立身栄達をあれ程願つてゐる主人公■の性格とピツタリ一致します。「十年ほどの時間がセーヴ出



来るのですから」

ところで、本人がこの最大の動機を ■■■■ 否定 ■■（死際
 になつてもまだ）してゐる ■■（一）とは、さういふ ■■ ■■

■■（偽善者）とすれば少しも構はないのですが、問題は作
 者の気持です。作者も主人公と共に、この物質〔的〕動機

を否定してゐるのではないでせうか。全体の文意から、ど
 うもさうとしか考へられませんか。つまり作者はこの人物を

「必ずしも」悪人として描かうとしてゐない ■■（一）です。

妙な云ひ方をすれば、作者はこの第三の動機のみが眞の動
 機として許されるといふ、主人公にとつては不利な事実

を、「主人公と共に」故意に認めようとしなにか、或は気が
 つかないか ■■ どちらかなのです。その事は讀者に非常な不

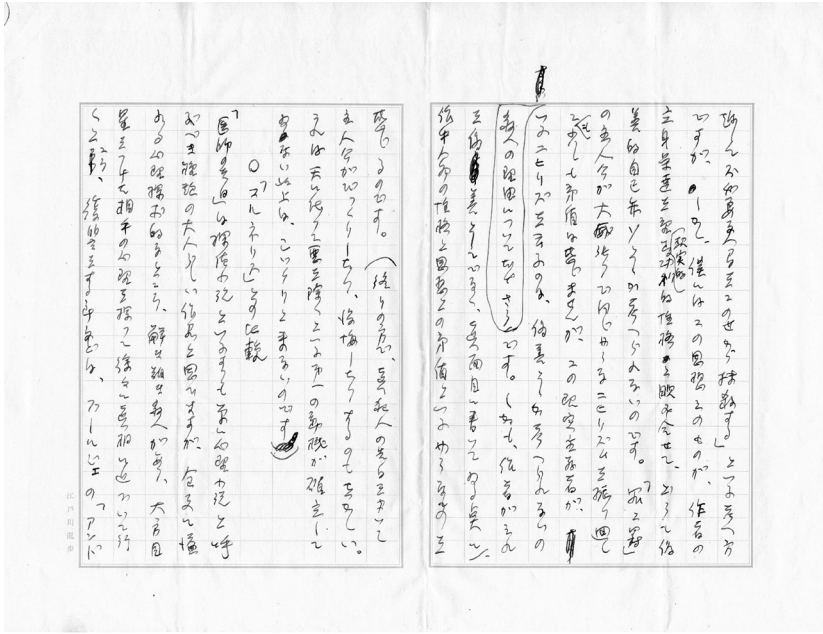
満を与へます。

別の云ひ方をすれば、主人公は科学的冷血漢と云つても
 い、程、さへ渡つた理智の持主ですが、この人物「が」の

殺人の動機が「全く」〔結局する所〕感情（功利と矛盾する
 感情）的なもの「の如く」〔に〕描かれてゐるのは、主人公

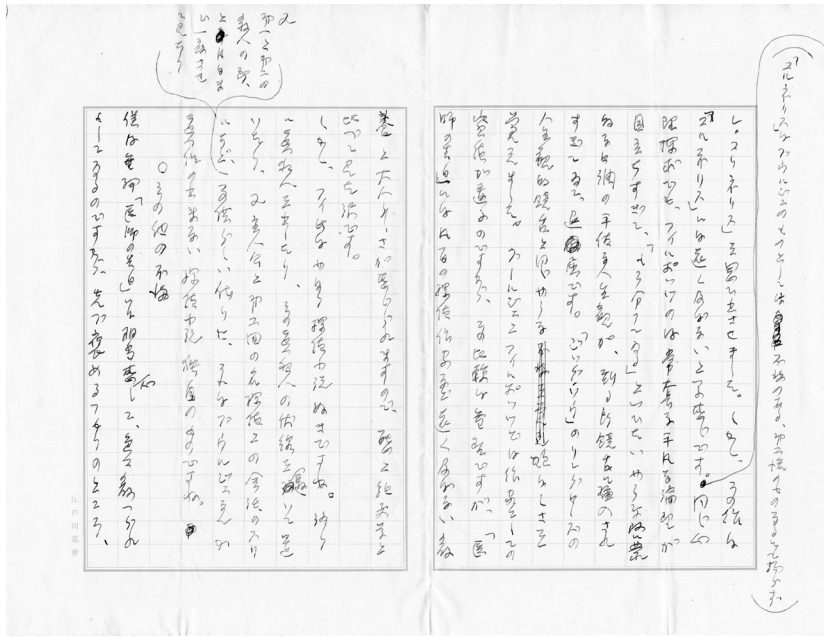
の矛盾といふよりも、寧ろ作者の矛盾或は昏迷のやうに思
 はれるといふことです。

「右は主人公の「考え方」性格と殺人動機との矛盾ですが、
 主人公の性格と彼自身の思想との間にも」



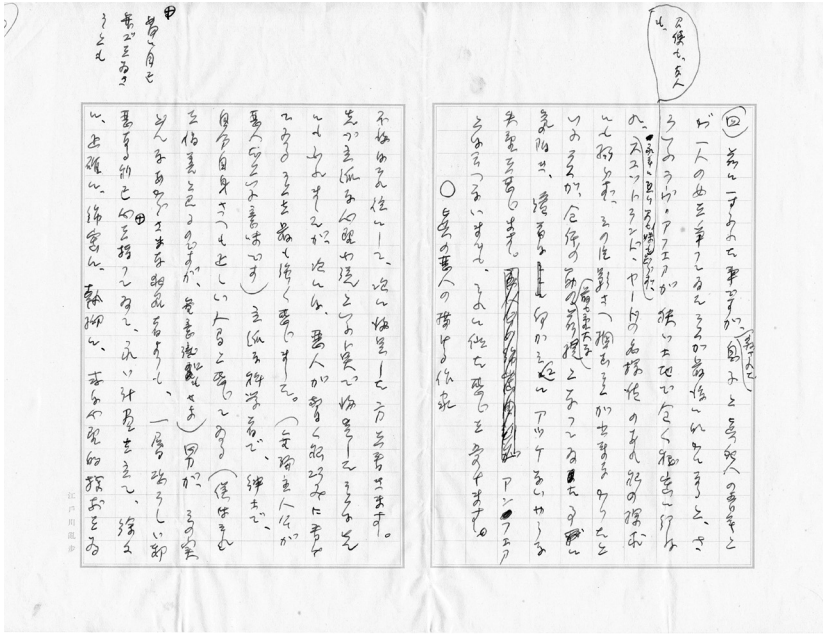
右は主人公の性格と殺人動機との矛盾ですが、もっと大きい矛盾は主人公の「性格」(行為)とその思想の矛盾です。彼の犯罪に対する思想は最終の結■びに要約されてゐますが、それ以前、殺人を決意する際にも、同じ思想がほの見えてゐます。一言に云へば「自然は無関心である。道徳は人間の社会生活が作り出した人間のものである。■〔私〕はその自然にならつて、「人為的」道徳を超越して不必要な人間をこの世から抹殺する」といふ考へ方ですが、しかし、僕にはこの思想そのものが、作者の立身栄達を望む〔現実的〕功利的性格と睨み合せて、どうも偽善的自己弁了しとか考へられないのです。「罪と罰」の主人公が大威張りで同じやうなニヒリズムを振り廻して「も」少しも矛盾は感じませんが、この現実主義者が、■〔殺人の理由についてだとさう〕いふニヒリズムを云ふのは、偽善としか考へられないのです。しかも、作者がこれを偽■善としてでなく、眞面目に書いてゐる点に、作中人物の性格と思想との矛盾といふやうなものを感じるので、(終りの方で、眞犯人の告白を聞いて主人公がびっくりしたり、後悔したりするの)もかしい。これは天に代りて悪を除くといふ第一の動機が確立してゐる■ない以上は、シツクリと来ないのです)

○「コルネリス」との比較



「医師の告白」は探偵小説といふよりも単に心理小説と呼ぶべき種類の大人らしい作品と思ひますが、全文に溢れる心理探求的なところ、解き難き殺人があり、大方目星をつけた相手の心理を探つて徐々に真相に近づいて行くところ、復讐をする所などは、ブルジェの「アンドレ・コリネリス」を思ひ出させました。しかし、この作は「コリネリス」には遠く及ばないといふ感じですが。「コリネリス」はブルジェのものとしては不満のある第二流のものなるにも拘らず」同じ心理探求でも、フィルポッツのは常套な平凡な論理が目立ちすぎて、「もう分つてゐる」といひたいやうな啓蒙的な口調の平俗な人生観が、到る所饒舌に挿入されすぎてゐて、退屈です。「ジッグ・ソウ」のリングローズの人生観的饒舌と同じやうな「不満を覚え」煩はしさを覚えました。ブルジェとフィルポッツでは作家としての資質が違ふのですから、この比較は無理ですが、「医師の告白」には凡百の探偵作家など遠く及ばない教養と大人らしさが感じられますので、態と純文学と比べて見た訳です。

しかし、フィ氏はやはり探偵小説好きですね。終りに眞犯人を出したり、その眞犯人の伏線を■「敷」いて置いたり、又主人公と第二回の名探偵との会話のスリルなど、



に大きな思違ひがあるんぢやないかしら」と一應反省して見る位の理智は働かねばならぬと思ひます。なにしろ人を殺すか殺さぬかの問題ですからね。

(四) 前に一寸ふれた事ですが、「殺された」息子と眞犯人の青年とが一人の女を争つてゐたことが最後に明かになる
と、さういふラヴ・アフエアが狭い土地で全く秘密に行はれ、「永年に互り父も妹も召使も、友人も、知らず、」スコットランド・ヤードの名探偵のあれ程の探求にも拘らず、その片影さへ掴むことが出来なかつたといふことが、全体の筋の「最も重大な」前提となつてゐる■た事「が」に氣付き、讀者は「ここに」何かこ「こ」にアツケないやうな失望を感じます。■■■■アンフエアとは云へないまでも、それに似た感じを受けます。

○眞の悪人の描ける作家
不満はこれ位にして、次に満足した方を書きます。

先づ立派な心理小説といふ点で満足したことは先にもふれましたが、次には、悪人が驚く程巧みに書いてゐることを最も強く感じました。(無論主人公が悪人だといふ意味です)立派な科学者で、紳士で、自分自身さへも正しい人間と感じてゐる(僕はこれを偽善と見るのですが、無意識に
もせよ)男が、その実どんなあからさまな犯罪者よりも、

④
 探偵小説の
 特色は、
 人物の
 心理の
 分析に
 あり、
 作者の
 観察眼
 の鋭い
 ことである。

探偵小説の特色は、人物の心理の分析にあり、作者の観察眼の鋭いことである。探偵小説の特色は、人物の心理の分析にあり、作者の観察眼の鋭いことである。探偵小説の特色は、人物の心理の分析にあり、作者の観察眼の鋭いことである。

し、細やかなるまでの探偵小説、人物の心理の分析にあり、作者の観察眼の鋭いことである。探偵小説の特色は、人物の心理の分析にあり、作者の観察眼の鋭いことである。探偵小説の特色は、人物の心理の分析にあり、作者の観察眼の鋭いことである。

一層恐ろしい邪悪なる利己心
 如何に自己弁ごを為さうとも

を持つてゐて、永い計畫を立て、徐々に、正確に、綿密に、執拗に、或は心理的探究を為し、相手以上の悪心を以て猜疑し、或は全く発覚のおそれなき殺人を計畫し、時と所の一致などといふ奇妙な着想をする余裕さへあり、殺人■後も冷血漢の如く平然としてその事件を論じ、名探偵の前で自分を疑■へと挑戦する程の「極端な悪人である」度胸があるといふのは、これが極悪人に非ずして何でせうか。大英雄にも比すべき大悪人です。その人物の鋭さ、綿密正確さ、執拗さなどが実によく書いてゐて、讀者を戦慄せしめます。この暗い暗い猜疑の世界。人の心の奥の■奥を探つて、動物として持つてゐる隠された邪悪の秘密を抉り出して来る探求は、探求者自身その邪悪を人■一倍に持つてゐなければ出来ないことです。

私は涙香の翻案小説に溢れてゐる暗さ、邪悪の魂原作とは別のもの、涙香自身の性格から生れたものと思ふ。

といふやうなものに引きつけられるのですが、ある評者は涙香物の最大の特徴は本当の悪人が書け■てゐる事だと云ひましたが、ある意味で同感です。それと同じことがフィ

赤毛の告白の「そ」をよんで、**■**「そ」れ**■**「が」**■**十二分に分りました。これこそ、ファイ氏の魅力の最大なものではないでせうか。「赤毛」の讀後に残る「異常な残像」は、涙香の初版本の挿絵のあの暗い邪悪の残像と共通するものがあり、つまりはこの邪悪を抉る深さ、人の心の奥の**■**暗さ**■**を探る執念」といふやうなものが、**■**■**■**残像と「錯覚されるのではないでせうか」なつて消えやらぬのではないでせうか。

赤毛の告白の「そ」をよんで、**■**「そ」れ**■**「が」**■**十二分に分りました。これこそ、ファイ氏の魅力の最大なものではないでせうか。「赤毛」の讀後に残る「異常な残像」は、涙香の初版本の挿絵のあの暗い邪悪の残像と共通するものがあり、つまりはこの邪悪を抉る深さ、人の心の奥の**■**暗さ**■**を探る執念」といふやうなものが、**■**■**■**残像と「錯覚されるのではないでせうか」なつて消えやらぬのではないでせうか。

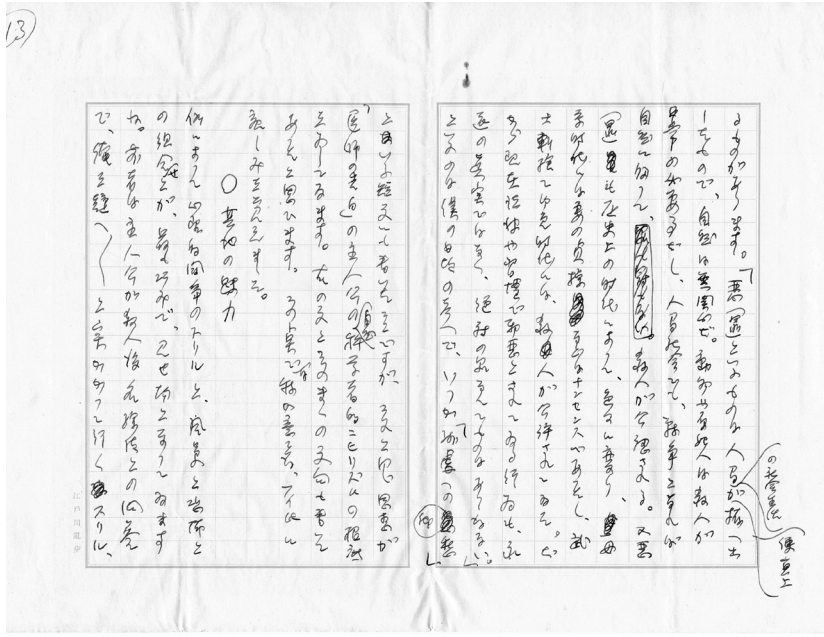
氏にも云へると思ひます。無論教養に於て涙香よりも優れてゐるファイ氏ですから、「描かれる」悪の深さもファイ氏の方が深いと思ひますが、質としては似たものを感じます。

「赤毛」や「闇からの声」でもそれを感じましたが、「医師の告白」をよんで、**■**「そ」れ**■**「が」**■**十二分に分りました。これこそ、ファイ氏の魅力の最大なものではないでせうか。「赤毛」の讀後に残る「異常な残像」は、涙香の初版本の挿絵のあの暗い邪悪の残像と共通するものがあり、つまりはこの邪悪を抉る深さ、人の心の奥の**■**暗さ**■**を探る執念」といふやうなものが、**■**■**■**残像と「錯覚されるのではないでせうか」なつて消えやらぬのではないでせうか。

探偵小説のみならず、広く文学**■**一般を通じて、かういふ邪悪の恐ろしさを描き得る作家「が」は、殆んど類がないのではないかと感じます。純文学でも一寸今それ程の作を思ひ出せません。ド翁などにもない味です。ア、バルザックには「極」悪人が描かれてゐますね。しかしファイ氏のはバ氏のと**■**も違ふやうな気がします。「ファイ氏だけにある味を」一口に云へば猜疑心の怖さです。この味も探偵作家だからこそかも知れませぬね。こ**■**■「れ」はもつと深く考へて見る「べき」事柄のやうに思はれます。

○思想の共鳴点

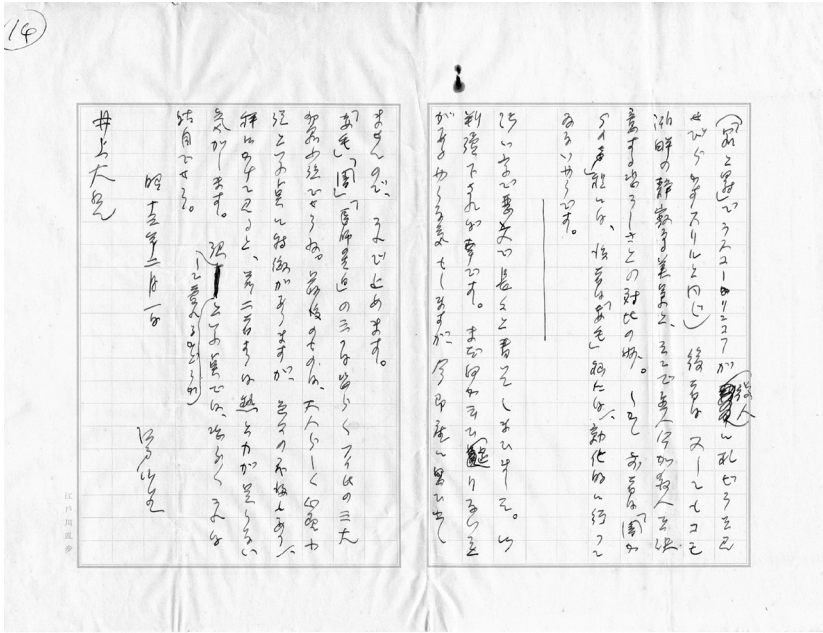
13)



主人公■の性格とその思想には矛盾を感じますが、「結論としての」思想だけ引き離して考へて見ると、この人生観には僕を「強く」引きつけるものがあります。「悪（罪）」といふものは人間「の社会生活」が「便宜上」拵へ出したもので、自然は無関心だ。動物や原始人は殺人が日常の必要事だし、人間社会でも、戦争となれば自然になつて、「罪も罰もない。」殺人が公認される。又悪（罪）■も歴史上の時代によつて、色々に変り、■母系時代には妻の貞操■などはナンセンスであつたし、武士斬捨て御免時代には、殺人■が公許されてゐた。だから現在法律や習慣で邪悪とされてゐる行為も、永遠の眞実ではなく、絶対の罪なんでものはあり得ない。」といふのは僕の日頃の考へで、いつか「残虐への■郷愁」と■いふ短文にも書いたことですが、それと同じ思想が「医師の告白」の主人公の「自然」科学者のニヒリズムの根底を為してゐます。右の文とそのままの文句も書いてあつたと思ひます。この点では我が意を得、フイ氏に親しみを覚ええました。

○其他の魅力

例によつて心理的闘争のスリルと、風景と恐怖との組み合わせ「せ」とが、最も巧みで、見せ場となつてゐますね。前者は主人公が殺人後名探偵との問答で、俺を疑へくと突か



かつて行く■スリル、(「罪と罰」でラスコー■リニコフが「役人」に札ビラを見せびらかすスリルと同じ) 後者は又してもコモ湖畔の静寂なる美景と、そこで主人公が殺人を決意する恐ろしさとの対比の妙。しかし前者は「闇からの声」程には、後者は「赤毛」程には、効化的に行つてゐないやうです。

汚い字で悪文で長々と書いてしまひました。御判讀下されば幸です。まだ何か云ひ■〔足〕りない事があるやうな気もしますが、今即座に思ひ出しませんので、これで止めます。

「赤毛」「闇」「医師の告白」の三つは恐らくフィ氏の三大犯罪小説でせうね。最後のものは、大人らしく心理小説といふ点に特徴がありますが、色々の不満もあり、秤にかけて見ると、前二者よりは熱と力が足りない気がします。訳■〔として呉れるかどうか〕といふ点では、恐らくこれは駄目でせう。

昭十三年二月一日 江戸川生
井上大見